



世事百談

三

隨
7
三

1 曾
349
3



曾不門
號 349
卷 3

品川

世帯百談卷之三目錄

米穀ハ國の基
慶安 女衞 肝煎
敷島花乃
法華經の巻教
いつたる教珠
氏寺
鄭巨が賣金金
田舎詞 俗語
時の鐘
鬼魔さるかの治療

必死と極楽
中人
東百官
草書心經
平形念珠 二連教珠
古巻と證とす
源氏物語
省文
熊膽の功能眞實の辨
食せぬと飢さる法

明治二十一年十一月五日
坪内雄藏氏寄贈

東京大学
坪内雄藏

三 目錄

唐人ハ浴ヲと云ハ詠
 呪咀駭
 豊太周
 安藝國可愛川の考
 勇士山の言さ

舟坐霊
 欺く寛魂を散
 曾呂村新左衛門 自為首
 おろへの磨
 翁同若

世帯百談卷之三

米穀ハ國此基

黄金萬貫不可療飢白玉千箱何能救冷と書紀み色
 ありて食ハ天下の本ありてハ上古も亦祈年祭として豊年を
 祈ると何人令子仲春祈年祭義解小欲令歲災不作
 不時令順度即於神祇官祭之故云祈年と云り安高
 孝記子九生活する物その生命を保つものハ食物あり言職
 魚虫小魚まで食物を求るを以て勤めとす況や人倫と
 や赤子出産すれば赤子乳味をりて生長して臣民おのけ
 家業を勤るハ食物を求る為あり食せざれば生長はた生命
 と保つとありて人倫の至宝ハ五穀なり金銀珠玉を宝

とすれどもその金銀珠玉を以て五穀を買んと抑りて之をも
年饑歲歉ありてハ多亂を以て五穀を賣るもの無き附子
てハ金銀珠玉ハ食れぬれあるハ忽ち饑死すべし然れハ五穀
ハ至宝あり五穀ハ生みくハ食れぬれあり五穀を食ども衣服を
着されハ凍死すされハ衣服ハ五穀よりき重りあり食糧と
衣服の外ハ有用の宝物ハあり皆食用の家あり永祿年中
を亂子天子も饑渴ヲ抑りてを以てハ六百萬石の高家も米を
取りとて饑を凌ぐを以てハ上へも亦三種の神異
ハ昔年子ありとぞも天子のハ饑を助けたまふと云はるなり被
時ハありくハ米穀ハ亦亦ありも考少く世に宝物を
稱するハ宝ありと云はるも五穀衣服食糧を調ふ善物ありも

ありては宝あり後代ハ食糧を生希を保つべき米を重んずる食ハ
れもせぬ金銀を求むハ愚也なり之ハ米穀より重んずるハ百姓は
ハ君を以てこそあり口を以てん百姓は君を以てこそありたんと
いふとて國家ハ富饒ハその次第一なりありされども亦ハ耕種を
力て出稼ありと云はるありと云はるありと云はるありと云はるあり
徳のたやときと上と下と云はるありと云はるありと云はるありと云はるあり
ありも腹の中よりひき出すハ大敵子きりてハ防ぎも道れ
もありとて昔の名將勇士たちの名もあき難をれ多しありあり
一紙に討れぬれハ大敵の教日食軍のいふありと云はるありと云はるあり
ありありとてそれを軍書子軍子ハありありと云はるありと云はるありと云はるあり
さんぐひひきくありと云はるありと云はるありと云はるありと云はるあり

の才も身とよせりありしごあやまの教も實り一途にあらざりて
 心とせざる伯父と傳りしまづらの活用とては戸ありしややく日
 ださるしやうぶくは格高子やと評入つるあはれもあまそこの中昔
 八人の新むすたすにて言とて言ひて度ぎさしちもやしきとのこあう
 一おごこの程の伯父と名んカも子く命をうとつぎうぬ老れさす
 きのふ今りとせありつる身の人と教つてあまをくせりいへははるも六月
 ありだあり川の舟に六枚十枚の淨舟波のうへに漂つてね琴三絶の音
 色ありしありがま大都會のありさぬ耳響うた眼をひあせとまき
 つる佐治うが身はひいやくにが舟の拙子く生るあはるとあは極め川
 あま身とあんと揮平より飛びのりなるとうらうら揚るよるこまづつる
 舟の中へ入るまま舟舟のうらうらあはれとせうまなるがこ舟の中

子撫は挨拶とふ人ともどめ琴の舟子多く居合しがその時挨拶は
 佐治うが身とあんとして舟の中へおちりし神とせりおちりし盲人
 とあはれはうが身とあはれ不便におちりしおちりし物をおね
 きまけるもいぬと歳もあはれは子あはれ何命と捨んとはせし一河の
 流と汲も此生の縁とまきあはれて死と極めしものけり舟子入る命つ
 つぎ子まひひと才あはれ因縁あり舟の上とせりあはれ極め助かりても
 ぼさせん死子でまかぬ罪もあはれとほけり同れり佐治うが身を
 とあはれその教りし其河の孔とのぐさてそれより伯父の活法都と名
 ては濃よりたむくのありしこの日以久しく艱難辛苦とて人尋ね
 あはれとてたむかひ一跡の跡へもあはれ身とせり覚悟とまらめてこの川へ命
 と捨し舟のうらうらあはれとせり舟へ入る極め其の成げと

ある事ある諸侯の縁を五とありその息女を五六千両持参
 の筆子おきり彼三入此若も合せくそ中を二多むむら
 多の取たを仕るそらふ此年世子あまぬきとん寛又五
 年己巳八月廿四の三入のやつさ追ひ放さぬとやその後より
 して人の世話するものを座あとのつと諸家源秘福子と又
 せんと云ハ女術の精説あるやうなるものあるをえり街ハ
 護り秘説を字音子あるハ文人の附会あるを抄ひみり子排
 人不角が此一誘討後集とふあふれいごをくとのふ前
 句子 女見をハ親父ぢやといふきき妹 柳水
 とらふ句あれハやうも女見といひとてめされハ女術の字音と
 いふもあふぐりあふ肝煎といふハやうき詞あり室所及日記子

又これハやうき秘説あるが、猿猿神及記子村の肝煎
 といふも又さう々の如く職名をありハいらくをきてあふ
 抄ふまきつといふハ源氏抄語子あふ心つれと詞と因ド
 ろをえりて即今いふ氣のつれとといふと然りお歌の詞
 小ぢひ子身をやきあふらうもあふいふも躁急心熱の謂
 あり二の詞此やうく又さうハ大後本抄門記子 甬上之突焦
 心中之肝とあま也源平成盛記子肝を焦すといふとあふも
 ことハ肝をいふとよませりあふ人頼子家訓子黒翟之後世
 謂熱腹揚朱之侶謂冷腸、あふ呂覽子焦唇乾肺費
 神傷魂といふも肝煎といふも語意似るといふと、
 中人

婚姻の媒妁す者ありては中人の義あり、双方の中
 子たちも婚後をさうむすぶすの義あり、中人をさうむすこと
 りハ音便あり、諸人をたひむと商人をさうむすと云例ありて
 朝鮮の訓業字會子媒妁俗呼男曰媒人女曰媒婆
 總稱中人とあり、

安島此及

安島の説子、我が國の事と安島の事と上古今ハ用え
 後代の詞あり、志き島ハ日本の總名あり、及ハ人倫の及あり、
 倫の及ハ聖人の教乃法あり、應神天皇の代始、聖人の及後
 聖来、以末代ハ天皇聖人の及を奉り、我國の風俗子隨
 ひて斟酌して天下國家を治る法を立て律令格式等をさす

めゆひしをこそ志き島の及といふ、凡そ武天皇東征を始め
 代々の天皇天下國家を治る子人を勞し、君臣とも下り
 うと志き島よりよそ居られ、及ハ志き島程、及ハ志き島の
 及といふ、及人の私言、及といふ、一條此論、及といふ、及
 と吾邦の風俗ハ武勇子勝まされば、及といふ、及といふ、及
 出べきと云、男子ハ男子、婦女ハ婦女、及といふ、及といふ、及
 そ志き島、及といふ、及といふ、及といふ、及といふ、及といふ、及
 體も其のつら、淫靡、及といふ、及といふ、及といふ、及といふ、及
 凡そ後學、及といふ、及といふ、及といふ、及といふ、及といふ、及
 破戒あり、及といふ、及といふ、及といふ、及といふ、及といふ、及
 志き島、及といふ、及といふ、及といふ、及といふ、及といふ、及

者乃慈覺大師為八講舍分為八卷而配之藏本有
七卷乃添品也非今本也
方子の法華經疏七卷を傳へていふは日本靈異記に鮎
八隻此法華經八卷小化したるなり此とあり、
七卷小を八卷とも分てると又さう推して出三藏記
小法華七卷より慧琳音義小八卷とあり、周元初教録に
七卷とを八卷ともあるなり

草書心經

あまの人の説き、高野大師の書蹟真州二體の心經今不世子
遺り唐土少く書き名ある人此書は經文八名家の夏庭經
晋の肘子書しく心經よりさく、心經ハ唐の虞世南の書き

より續子稔遂良の心經あり、つづれに真書よりなり、睿宗
此時子よりて鄭系初州書心經を書すと唐文粹子出つ
大師より八九百年やど古く總て州書りてり、
希あるは大師より子やと知り侍り、己子とさく、
ちやく大師より以前子あり、但しこ色より好い、
北宋よりより、蘇黃此誌賢孫宗を好く、
しと多し、宋末よりより、蒲萄の能画する、
心經あり、
いさゝかの教珠 平形念珠 二連教珠
諺曲の詞をとりたるの教珠あり、
たうといふはあまの此轉訛して、
三

ありの水を三例の如くをぞ、（一）宗要文の淨土宗の條子大勢至經を引く云、以平形念珠者、是外及弟子也、非我弟子、我遺弟子、必可用圓形念珠、とある、今ハ、おん、平形念珠、の如く、異邦より舶來のゆ、此ハ、多く圓形、の如く、あり、
子、邦の念珠を造り、の、平形、がつ、を、た、あり、よ、な、れ、ば、あ、り、
人、（二）連の念珠を、と、その、の、よ、ハ、淨土宗、諸廻向宝鑑、子、淨家、二、連、教、珠、鑑、觸、出、神、傳、上、人、常、成、給、仕、有、謂、阿、波、介、念、佛、若、仕、出、二、連、教、珠、始、此、阿、波、介、彼、阿、波、介、指、百、八、教、珠、二、連、其、所、以、尋、人、子、子、字、隱、為、上、下、畫、易、其、然、一、連、稱、念、仏、一、連、取、教、所、續、教、取、子、子、易、然、被、畫、と、あり、子、あり、て、圓、光、大、師、此、傳、を、案、す、

る、阿波介と、陰陽師上人、給仕、して、念佛、す、あり、け、
至、の、阿波介、百、八、念、珠、を、二、連、の、ち、く、念佛、し、る、る、
その、故、を、人、た、る、ね、ら、色、ハ、弟子、ひ、ま、あ、く、上、下、す、れ、ば、
然、つ、れ、や、け、一、連、の、念、佛、を、ま、ま、一、連、の、教、を、
て、つ、ま、る、と、ま、る、の、數、を、弟子、と、れ、ど、然、や、す、ま、る、つ、れ、ど、
る、あり、と、ま、る、と、ま、る、と、ま、る、と、ま、る、と、ま、る、と、ま、る、と、ま、る、
二、連、教、珠、の、始、と、す、ハ、非、あり、阿波介の、念、珠、二、連、を、り、て、
授、子、の、あり、が、さ、し、阿波介、才、圖、を、ハ、大、樹、を、此、上、人、造、れ、る、
し、の、も、も、謬、あり、忍、微、阿、高、行、業、記、子、師、生、平、唱、瑞、之、數、
珠、五、十、四、珠、而、別、穿、表、形、二、十、珠、鉤、鎖、相、連、攝、之、記、
教、蓋、鉤、鎖、二、穿、以、一、過、為、千、声、也、且、表、形、之、新、製、護、

そ、

画史會要子載するところの圖



画史會要子載するところの圖、埋兒賜金の圖、ハ、くの如き
 金を數多く焼てたるとり、同書子載す探出が圖、ハ、冊
 くの如き形子居たり、されハ、金子居るとハ、やうハ、あきとあや、ら、ら、
 の圖子も己子とて、金上取ると、本文子あきハ、探出、ら、ら、と
 して、

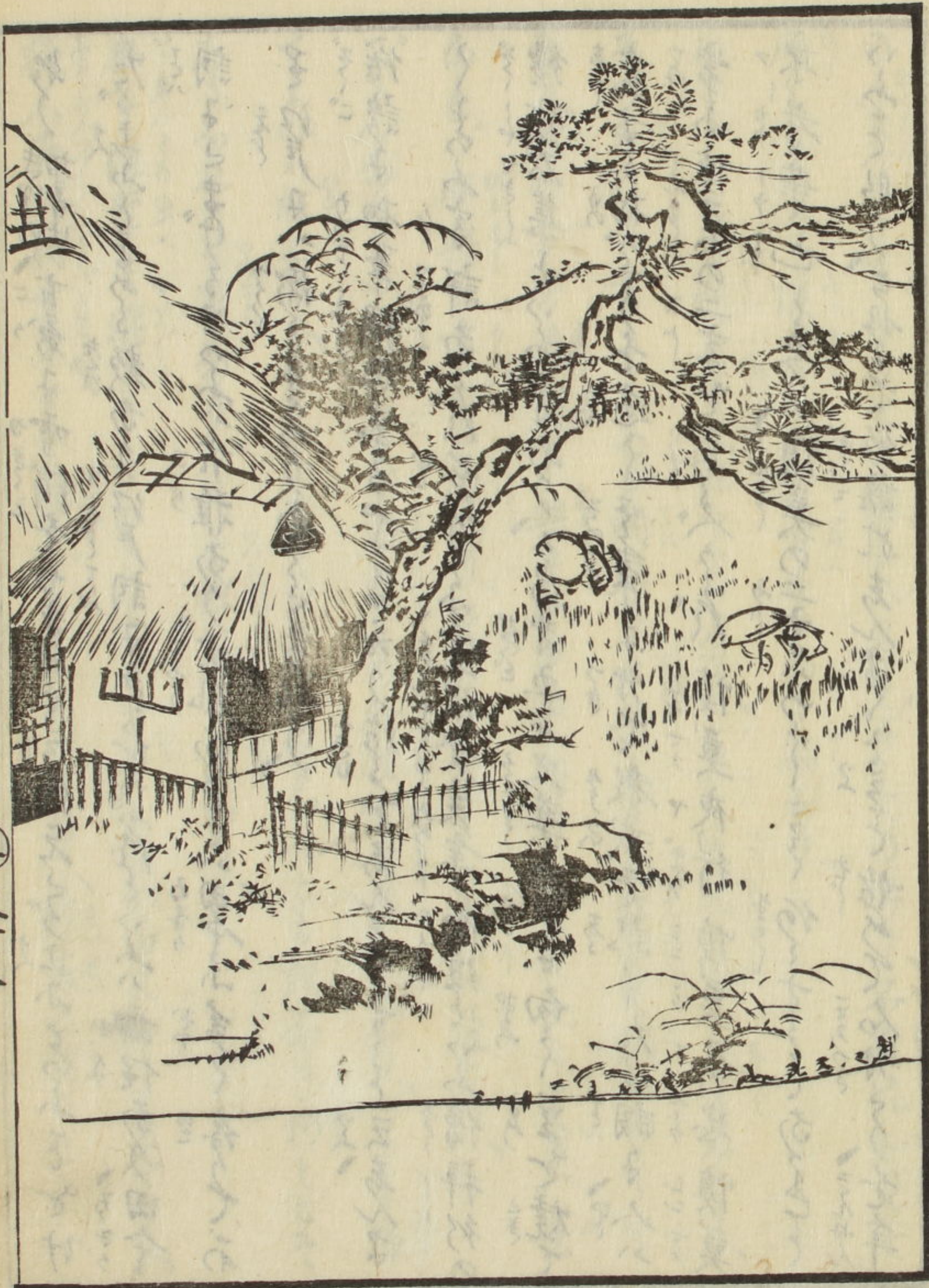
源氏物語

源氏物語の七い、あ、子、桐壺の、い、と、と、帝あり、更衣の女官と藤原
 のひ、その腹、小白子、出生、是を、老源氏、よ、ふ、その母、名、く、死、去、
 す、帝、哀、こ、子、地、え、す、その、人の、慰、め、小、帝、の、姪、あり、姪、宮、を、中、宮、
 と、し、藤原、子、任、せ、ら、る、是、伯、父、子、て、姪、と、妻、と、す、ら、る、老、源、氏、
 壺、の、宮、子、密、通、す、是、種、母、子、通、す、あ、る、そ、れ、後、壺、の、腹、子、老、源、

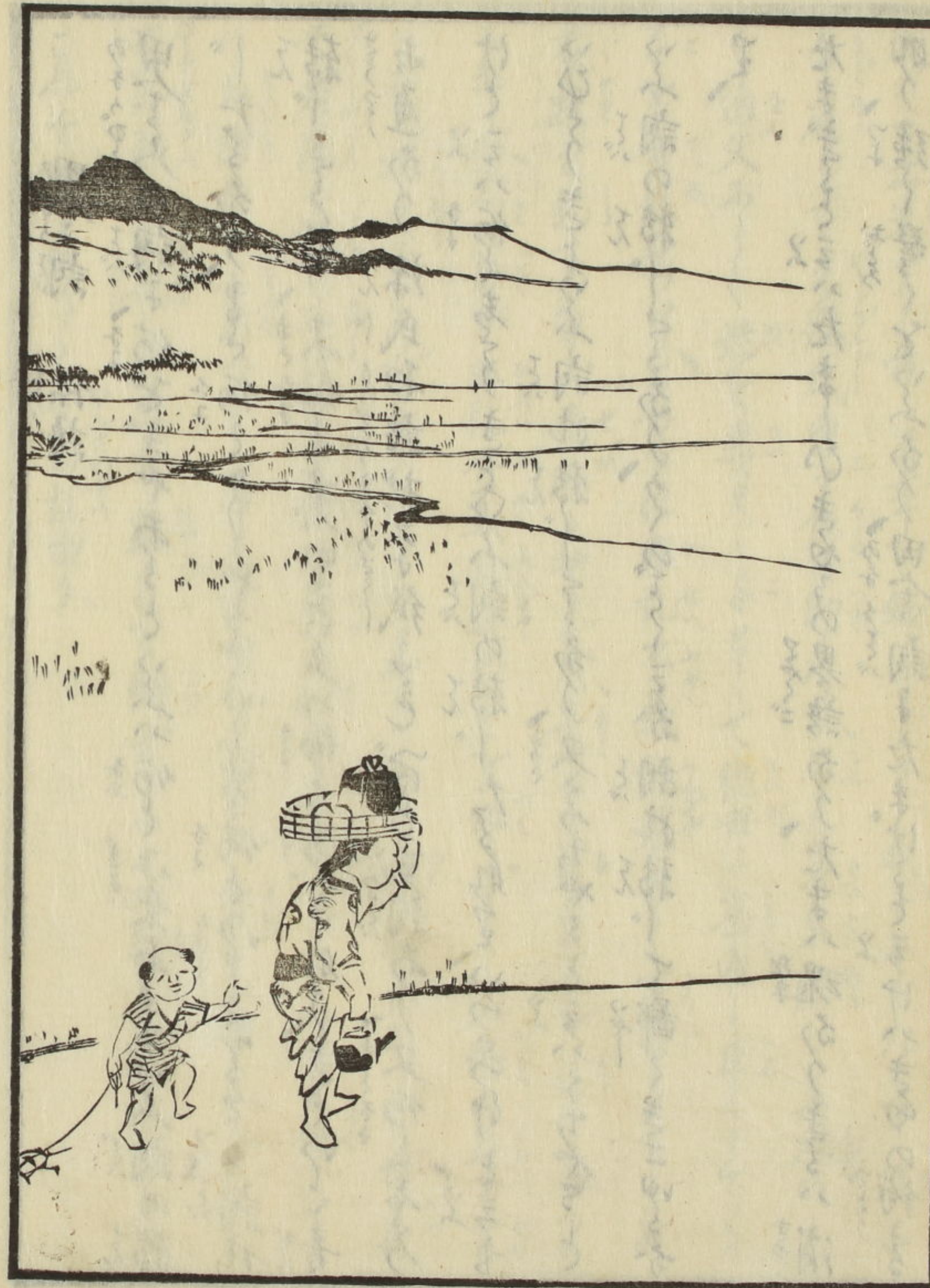
氏の子本末より帝二の事を知りて我子とすたまふ後子
 帝崩じて老深氏の子伝子即たり是を冷泉院といふ右の事
 く伯父ありて姪を妻りて子ありて後母子密通し臣くして
 子を帝位につけたり此非礼不義乱逆なり実事子てそれ
 事蹟を記すあるは是娘子母を恨み喜ありをききてを怒けりつ
 るあり右の如き非礼不義乱逆の事と伝へずとも人倫の及子背
 りざる好色のこの如きものやありてよく伝へざるべきあり
 学考備ハ深氏物語を重經賢傳の如く子考べどもありき伝へず
 の物語あり女のつらうたるものやありてあまハ怒るまやあまされど
 紫式部ハ文才もあつて教養を辨ずるなどの智もあつてあまハ
 これを怒るなりと安富説あり

田舎詞 俗語

田舎人の詞子何とぎやあるといふハ何と云ふ意ありといふ詞の類
 いたるあり、も何とやりやるといふ者何と云ふありと云詞は
 転ぐもなり又何とすいこふハ何と為べきなり、きとゆと音
 お通あり、深氏物語枕草紙も色づると云詞あり又何とあふ
 けと云ハ何とあふきと云詞の類、たふれを、いつつけと云も
 いひりきと云詞は、たふれと云あり又うちやると云ハちやると
 いふ詞の類、たふれと云あり、うのうと云か詞は、たふれと云
 たり、
 たまぎと云ハたまひきめるの畧語あり、たまハ魂あり、たまハ消
 れ、強く登くと云ふあり、田舎詞はたまげると云けハきぬの約する



三
又
三



三
三
三

如^き切^の古^の子^の雪^の消^を也^まき^けと云^ま消^えら^う上^の小^のふ^とせ^け
た^ら上^のふ^とせ^けも^ある^類あり^以戸^の詞^子ま^をと^るふ^とせ^けと^いふ^ハ鄙^任あり^田舎^の
詞^子と^まげ^ると^いふ^ハ古^の雅^{あり}古^の風^{あり}と^いふ^ハ田^舎ふ^多く^存り^てあ^る
且^江戸^子ハ^御と^子ら^うあ^ると^まれ^り、
信^詔子^ハお^事撰^ある^るや^う子^ハえ^り治^ると^あん^まく^すと^云あ^んま^子
く^との^ふ字^詳あ^るん^がゆ^ひく^小寛^保登^亥年^南漢^とい^ふ僧^擇初^の
鐘^砂石^集と^いふ^書あり[、]その^才五^子火^葬の^坑子^向く^豆を^焼て
食^する^おが^うを^述く^に事^子け^て教^戒を^記した^る詞^子人^ハ
常^小慎^莫の^二字^と忘^るん^が慎^莫夜^行慎^莫不^忠慎^莫
不^孝等^也と^いふ[、]慎^莫の^二字^ハつ^とく^何す^とあ^ると^いふ[、]
い^ふと^如く[、]これ^よて^信詔^れあ^んま^くと^いふ^と始^めて^ん付^らう^を年

の人^著く^る書^{あり}と^も書^をハ^るん^がき^をの^如く[、]不^慮れ^知見^を
用^くと^{あり}慎^莫の^二字^古より^ある^詞あり[、]
ひ^きま^うと^いふ^詞常^々人^れい^ふと^{あり}古^今著^聞集^子あ^るん^がき^を
その^外れ^古書^子も^ある^詞如^く比^興と^いふ^ハ誤^子て^例の^ある^字
あり[、]非^の字^を用^く興^もあ^ると^興の^さら^うと^いふ^ハ意^を
あ^るハ^非興^と書^へま^とあり[、]比^の字^もハ^義理^通也[、]
こ^のん^あれ^とい^ふ詞^平家^お兼^之の^外れ^古書^子も^ある[、]こ^の字^獨
て^よむ^ハ非^{あり}と^いふ^んあ^ると^いふ^ハこ^のあ^るれ^とい^ふ詞^{あり}何^とと^そ
あ^るあ^れと^いふ^事あり[、]こ^の五^條ハ^安富^詔あり[、]
幽^を隨^孝子^遊里^子す^いと^いふ^とハ^久し^くい^ふあ^るせ^うと^いふ[、]
職^人の^詞書^ハす^いの^後せ^うと^{あり}と^いふ[、]醒^南の^歌子^七十一

番職人共平年子、其後せよ、くぐりやとらきあやまてを
 見て、そのひがとあり、古年子ハす、みらんせよとあるをや、今按子
 す、その調々をきとあり、料の字音、わが、万事子、く
 きん、く、義子、あ、手、は、戸子、通、と、を、大、後、子、す、め、と
 通、と、万、事、通、達、す、義、あり、禁、籠、気、子、い、や、が、る
 どの、き、ろ、せ、く、睥、の、て、い、め、と、ら、あ、あ、あ、す、睥、の、い、き、
 た、と、ら、う、の、こ、え、と、ら、大、後、子、と、ら、い、一、の、外、も、控、あ、ま、と、何
 る、
 江戸にて盗賊を、とら、やう、と、い、ひ、大、後、子、て、ハ、放、蕩、者、と、ら、や、う、と
 今、按、する、ハ、盗、賊、と、ら、や、う、と、い、ハ、取、と、ら、ふ、調、の、結、り、お
 を、盗、取、り、負、つ、せ、る、稱、不、て、あ、う、と、い、ハ、人、を、や、め、と、ら、調、あり、

大台番あり、そので、古、わ、う、色、黒、き、わ、れ、と、黒、う、と、い、ハ、れ、類、あり、
 一、の、調、れ、例、を、不、多、う、放、蕩、者、を、と、ら、や、う、と、い、ハ、と、ら、い、調、の、結、
 あり、二、花、と、ら、い、と、い、ハ、墮、落、の、訖、言、あり、取、り、締、を、き、ん、を、あ、ま、
 くと、い、や、お、あ、と、と、ら、誑、あり、ま、ま、今、昔、お、話、の、度、羅、崎、の、故、事、
 あり、起、ら、と、ら、不、説、も、や、く、と、ら、い、と、ら、れ、う、あ、ま、れ、う、や、
 或、書、の、説、子、す、と、ら、女、の、男、換、む、子、ハ、心、を、ハ、見、よ、人、を、か、ん、を、必、
 一、男、さ、と、ら、ん、ハ、父、母、の、も、と、ら、ひ、子、後、あ、と、ら、我、と、ち、く、い、あ、ひ、つ、中、
 へ、う、あ、も、と、ら、い、き、と、と、ら、と、ら、う、あ、ん、と、十、割、抄、子、あ、ま、と、ら、い、と、
 今、も、男、女、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、
 調、と、見、と、ら、い、
 瘠、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、ら、い、と、
 友人、後、色、を、補、れ、漢、海、魚

譜子、ひらふす漢名いまで詳あ、魚鱗魚鱗類あり、そのうち瘦て
 骨ききを以て土佐の誘小瘠人とひらふすといふをこそ人
 あり世の人情ハウコウハコウのあり、詩多子物を誦するもこそ
 白氏此句と空海がゆのよきたまふをこそそれたをまてあふくも
 抄をえず、くくく鄙賤のをれとくも月八月をハ空海、再みひ
 いさうやをこそありれ、詞此雅依子ありくそのとれとくもく
 周のころつやうとくもきためあり、あふ人云陸叔翁と西後法
 師とハ附代も存と因くくその吟詠のたえて似たりと、叔翁の詩
 子何方可化身千億、一樹梅前一、故翁西好の言ハ
 よの山をこれあをりの及ておさるぬこのをこそ尋ねん

とつてハ詩多子そののんをえんまお似たり、まて唐詩乃爾
 類揚柳枝已被春風吹妾心正欲絶君思那得知とい
 了を、服南郭の和詩子諱一たまふ、
 及のこれ妻柳すく風吹れくあふよの、こころ心ハやる
 せふやぬくくくこころ子ありんせん、

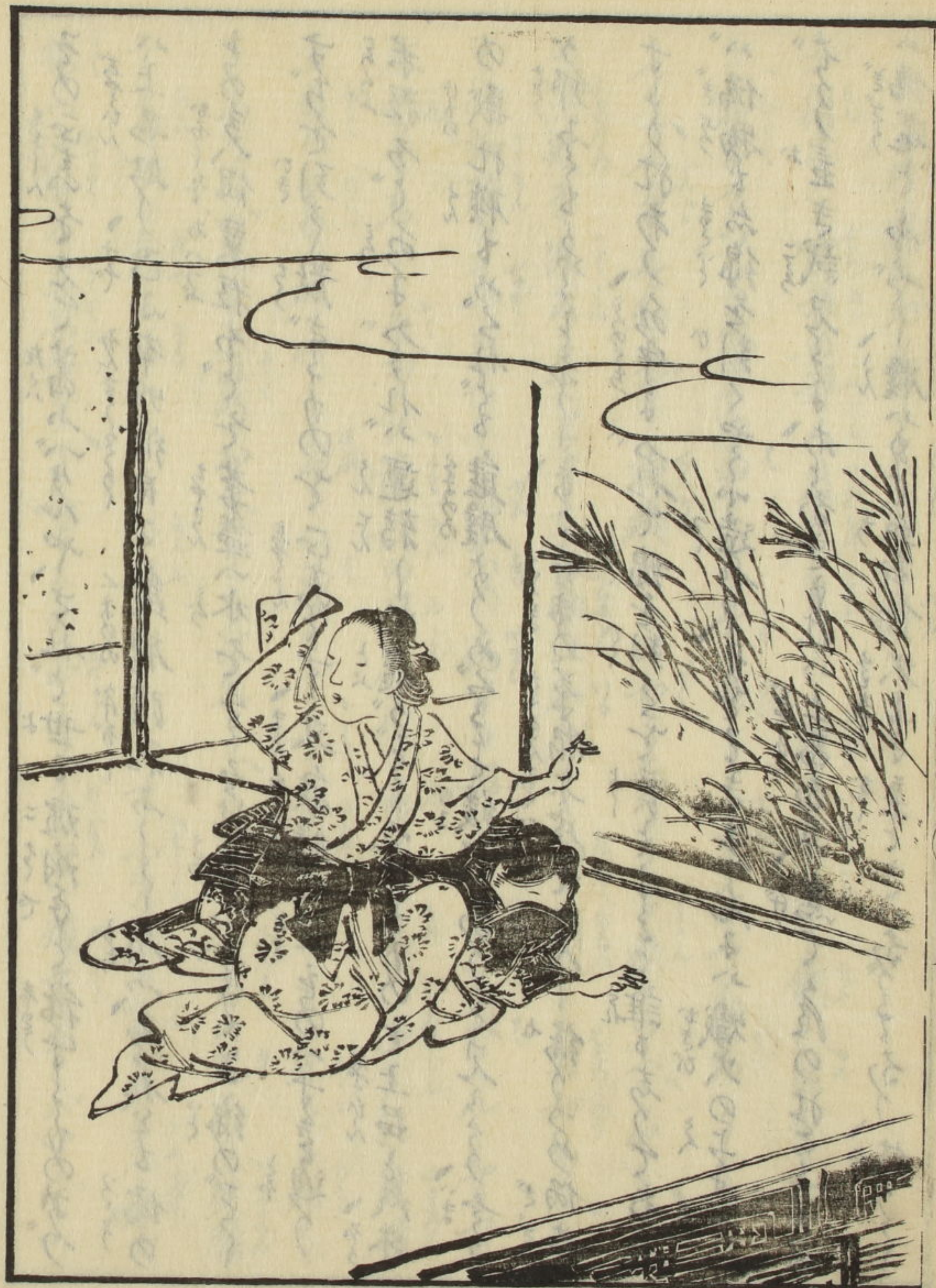
省文

省又子をもく此別ありそのちひねハ己子又教温あ子より省又子
 似く省又子あふるものあふ十三支の寅を子子似くと安者の記
 小寅此字の代り、日本此似刀此字を用ると刀ハ火鬚斗の
 如くあふ善れ、軍中より湯をこらへ、食料を煮る物あり、こ
 まをどうの如く打く鳴るの小木用るとどうのふんまで寅のうい

熊膽の切并子其儀此辨

子痛そく懐妊の婦人月救まうく俄子氣絶し倒し服をふんひり
き腫子をつりあがて毒をくみ舌をぬき手足をやむる効りしそり
うり人事を知りず痲病やその如くあるそ子病とふをやく正言
の態様を濃あまてときく口中一カ登く用で甚妙あり、よ
それ効験を直子にさるるある病の病する婦人の命を救えんと知りし
急是をあるもあかり懐妊の婦人ある病にハ驚く正言此熊膽
を求め蓄へおくり多子にゆき母用をやくそ赤子に用る
てわりのづれも求めおくりきりせり、とこれ安南の記あり熊膽
を蓄へ急子ゆふも妊婦のそれすもあある病にハ驚く正言此
極ふ必用の薬ありされどその正言とこれの證をふくはうてり

その正言をえて蓄へバレンや、されど世子琥珀子と稱すものあり
ハ上あかり己小本州綱目子熊膽陰乳し、用ハあるは偽の
もの多、但粟粒やとを蓋へ水をそき、それ中へ入る子線のどく
すちを引く散ざりののを正言とす、又熊膽の佳ものハすき通りの
米粒やとみ子なるハ運轉して飛ぐとく、わらわりのと上品と凡外
の獸此熊もみくれも熊膽よりめぐる、と後やらありとえ、今
が邦あくもく、ま、苦味、草根木皮をせん、焼つ、つ、偽造
する、これわつ、あ、い、て、綿を引く、と、良とす、と、誰かあり、て、われ
ハ偽物も糸綿を引くや、小造り、そ、と、き、ま、ん、子、ハ、熾、火、の、上、子、や、
ち、り、垂、き、試、ん、ま、あ、と、き、れ、ハ、上、品、あり、焦、て、産、の、れ、と、その
ハ偽造とあ、く、熊、ハ、ち、血、る、ハ、火、上、子、と、き、ハ、あ、る、と、あり、焼、り、く、



くして仙人せんじんをたねる、持もち 悪あく者ものを五ご合ごう胡こ麻ま三さん合ごう水すい子じ一いち夜や浸ひし、蒸むす、三さん度どまでく干ひす、二に色しきもも子こ手てまでく皮くわをくちりき春はるむき、春はるのはたたぶ
どどままつつぬぬ甄けんの中ちゆう子こ今いまくく成なりの時ときありあり子こはは耐たままてて蒸むしてあるる日ひ寅とら
の時とき子こ出いるる日ひ子こ干ひ舟ふねでく食くふべ、春はるをくちりきをく一いち食ごうハハ七しち日にち飢う
す、二に食ごうハハ早さう九く日にち飢うす、三さん食ごうハハ三さん百ひゃく日にち飢うす、口くち食ごうハハ二に子こ口くち
百ひゃく日にち飢うす、ししてて顔かほ色いろ赤あかららんんはは子こ足あしのの傷きずきき少すくくくもも常じょう子こううのの事こと
子こ、王わう氏し、このこの三さん方ほうハハ唐たう土ど子こでで飢う饑きのの耐たままてて多おほくく人ひとをを漏すらら名な方ほうか
王わうとといいふ、因いん子こ云いふ、人ひとのの通とほををぬぬ管くわん底てい又また井いの中ちゆうああららああややままちちくく落おち
りりたたららうう、ああららひひハハ海かい上じやうああららもも一いつ切せきのの食く物ぶつかかききままららううもも命いのちをを
つつききままららもも身みん體たい氣き力りきややららんんささうう方ほう壽じゆう世せ保ほええ子こ口くち口くち唾つばをを一いち食ごう
たためめててハハののここみみ又またたためめててハハ飲のここららくくれれ如ごとくくすすもも年ねん一いち日にち一いち夜や子

三百六十度ど飲のみみああハハ何なん十じゅう日にちもも飢うすすととらら、二にれれ子こつつききてて語ごありり
心こころ徳とくののここらられれととららううやや、空くうはは宗そう持ぢいいふふ人ひと武ぶ義ぎ子こ任にんししををららうう常じょう小せう
ここららややすすままらら僧そうのの形かたち教きやうありり七しち日にち食く食くしてして礼らい拜はい形かたち存ぞんすす同どう
行ぎやうのの僧そう一いち人にんありり彼か僧そう子こ右みぎのの唾つばをを飲のここむむ方ほうをを教きやう小せう彼か僧そうああららくく信しん
てておお勤きんむむ同どう行ぎやうのの僧そうハハああららうう笑わらううこれこれをを用もちひひすす、形かたち法ぽうハハ子こ手てをを
くく同どう行ぎやうのの僧そうハハ子こ手て痛いたむむここのの外がひ子こ手てををむむ又また唾つばをを飲のここむむ僧そうハハ
好この子こ手てををむむ行ぎやう法ぽうををここららうう子こ手て満まん行ぎやう成じやう就じゆうししととららううととららうう、昔むかしああ
ままのの唾つばをを飲のここむむのの方ほうハハ初しつ験けんささああららうう昔むかしああのの唾つばハハ身みん液えきああららハハ吐はくく入い
てて飲のままハハ身みん體たいのの洞どうををままままんんととららううああららうう、常じょうのの養やう生じやう子こ手てももんんののああららうう
ししまま子こ手てをを飲のここむむをを枕まくら壽じゆうをを授じゆうすすとと医いんん方ほう子こ手てももんんののああららうう、
唐人たうじんハハ俗じやくセセババとといいふふ諺てんげん

世人の諺、唐人ハ浴するを好まざると人のよけれあつた
り抱くさま性ありはと唐人をいふとを勢ふ、癸辛雜識續
集子、蜀人、未嘗浴、雖盛暑、不以布拭之耳、諺曰、蜀人
生時一浴死時一浴とあり、これをもとを説くつとく、唐人ハ
湯あそびをいふをいふとやと勢ひるも、ある書子、李益、蜀人ハ
家言子、倪涵、谷考、唐子とて、澡盆を借るの書あり、其文子、弟
入都半載、塵垢滿身、未経一浴、無其臭也、此人、都、不
辨此、且謂多浴、耗神不審、此地、諸公、得此、養生妙訣、
果能与彭、錢、比、算、否、老、羊、翁、以、南、人、居、此、必、能、避、此、
迂、風、幸、為、一、假、磁、盆、寓、中、俛、有、但、恐、浴、至、好、處、忽、然、
瓦、解、喫、驚、致、病、則、耗、神、之、說、驗、矣、將、為、北、地、諸、公、所、

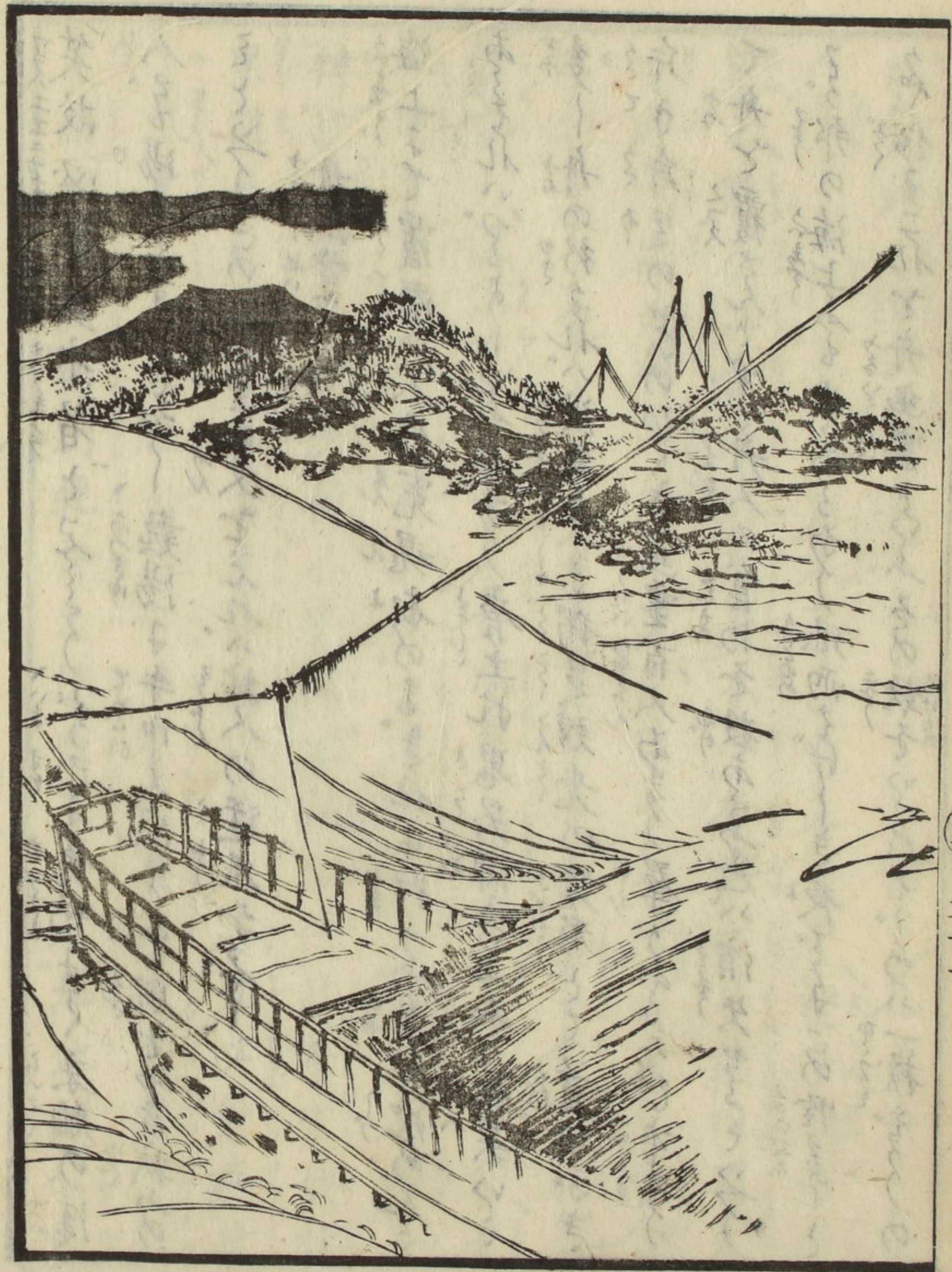
笑故必求其木者、と云々、今已子長崎、子く末船の傍
人、も湯あそぶと云々、熱湯子、巾をひいて、肌をさき拭く
こと、と云、この一家言の文をいふ、北人の迂風あそぶ、

舟幽霊

海上にて覆溺の人、此、克魂、夜のまき、れ、子、行、ふ、舟、を、沈、め、令、
あ、そ、む、れ、い、づ、つ、よ、い、と、あ、そ、む、り、唐、土、に、鬼、火、灘、と、い、ふ、お、ハ、怪、異、い、
多、し、舟、の、朽、れ、ハ、没、頭、隻、子、獨、足、短、禿、の、鬼、形、と、て、首、の、か、き、
斤、子、斤、豆、の、せ、の、ひ、き、き、幽、霊、百、人、あ、ま、り、羣、り、あ、そ、む、い、本、身、
て、舟、を、覆、さん、と、す、舟、人、の、食、料、を、投、あ、そ、む、ハ、消、失、せ、る、と、云、
つ、邦、の、海、上、あ、も、あ、そ、む、あ、そ、む、風、雨、を、け、き、夜、に、子、ハ、怪、多、し、と、
や、俗、子、これ、を、舟、幽、霊、と、い、ふ、その、故、を、い、ふ、を、い、ふ、ハ、一、掃、さ、る、の、



三十一



三十一

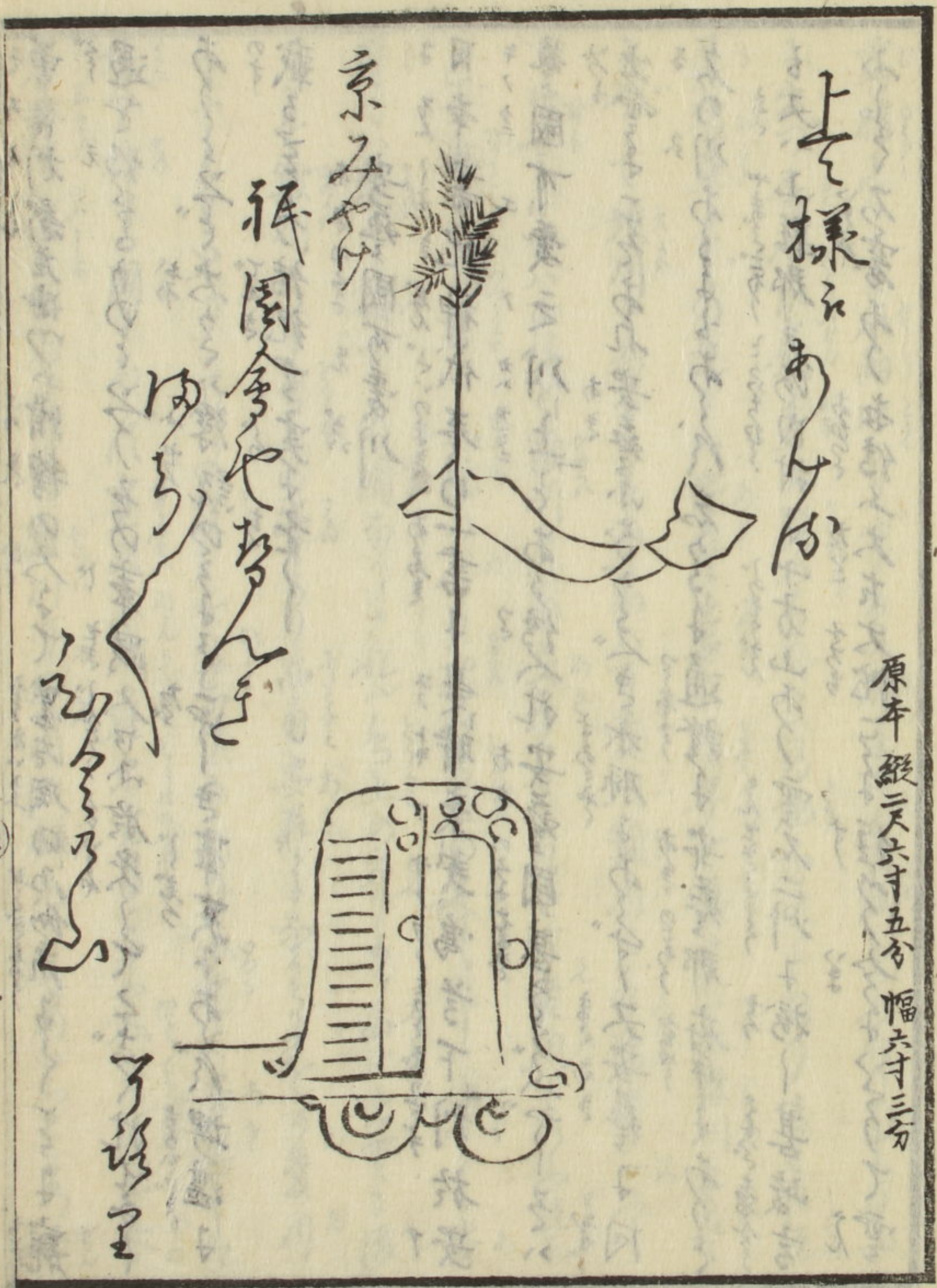
つゝ人々もあやうくその本に下りて動いたればその人におまきさう
露くわたりさしてその人さう然るのうらもその如く三つけさ人さうハ
大刀をささるれといひくくや誘ふも盗すも子ハ悪くして纏らう
こまきさうとさうあやうくの人情といふこれ子つきて一語あり何
某が家僕その主人に對し指さる罪ありがその僕を斬られハ
今對して義のまきさうとわうくは依く主人その僕を討てせん
とす僕憤り然て三妻さうたる罪もかきま子討てせん死後
子崇りてわうく必に殺すがと主人さうひて汝何ぞさうを
かうく我をさう殺すをわんやとハ僕いあうりて見よさう
殺さんといふ主人さうひて汝我を殺さんとさうて何の證もわ
今その證を我子にやその證ハ汝が首を切たる付首飛く處

石子撃つけ夫をなれはたるをわん證とすがと三さて首を切
たれば首飛びさう石子撃つさうその後何れたるもさうわん人
その主人にそれ事を問われハ主人さうく三僕初ハたるをれく我
を殺さんとわん心切あり後ハ石子撃つきてその駭をんせん
とわん志のさうさうんハありハわんたるをわんを忘れて死
たるよりや崇りてとさう

豊太周

豊太周の事ハおれさうとわんを玄頭を周記を子母ハ折萩中納
言の女と書されわんさうもさきさうとわん持萩と家号をさう公
卿ハさうさきさうのそや豊太周ハ豊太周ま世子ハありさう付子さう
たる書あり父母ハ知れさうさうさうハさうのそハ老和語

子收りたる太周出生記や実子そらぐりて朝祥を攻り後子大
 明を攻りんと欲したるハ苦量大なる人として稱美する人多し安
 畜の端ハ苦量の大なるハありハ苦量少くく欲んやハ大なる
 人あり苦量と云ハ才智ありハ豊古周ハを學又盲ある人して愚才
 智あり善才正智ハ一唯虎狼の如く武威を以て人を怖畏
 やめて國を治めんとす假令朝祥を殺せたりたるとも何の徳
 ありくその後を治平ありしめんやとんや大明を治術を知
 らんく大國を治めんと欲しハ是欲ん限りき廣大ありく
 苦量ハ甚く小き人ありと云ハ此論を考ふるややく己子貝原萬
 信の徳邊録の序子朝祥征伐ハ所謂急兵貪兵ありと云
 曾呂判新左衛門自畫賛



上を様はあはれか

京みやび

祇園金也夢人

ゆらり

了了

原本縦三寸五分 幅一寸三分

曾呂利新左衛門の滑轄の人にて豊後周の山物流子とて子寵
遇を好むるゆゑとてその事蹟人曰小於灸して之をくれば子
ありとて大く浮説の事とて一き事実子あり埤璣子
載るる所を信託せし書を

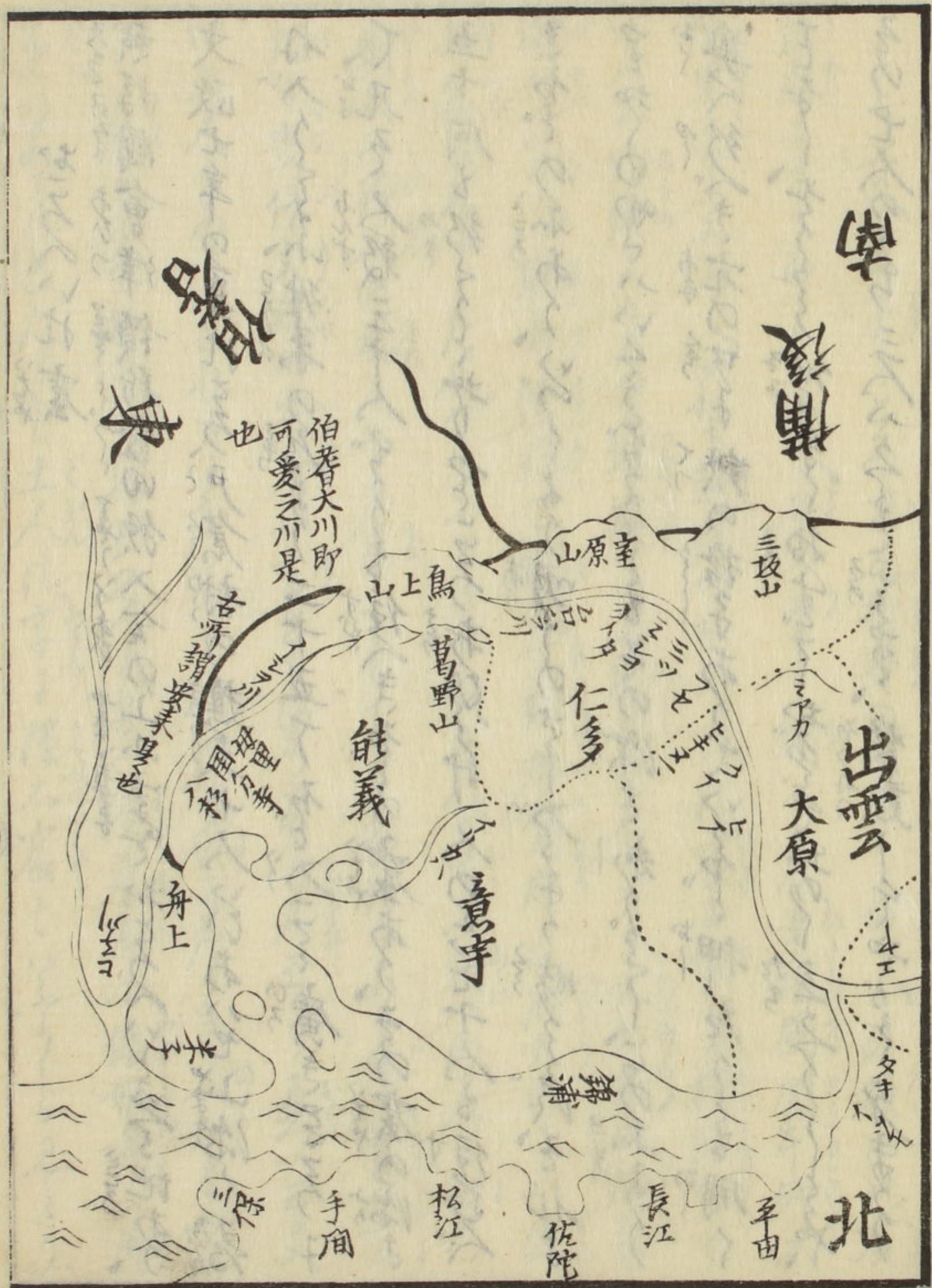
安藝國可愛川

日本書紀神代卷の一書子是時素戔嗚尊下到於安
藝國可愛之川上とある傳人此安藝國甚くふふとそハ
出雲子こそあれ安藝ふかぐさき水脈子あり又安藝子同
名の川ありともあるは志るる子通謄子安藝那府傳子ありと
も又ハ山縣郡戸内村子十方山あり雲石二洲子橋一甚峻言
少くもる書ありお傳ふ大古大蛇こり子任りる子とて雲

霧騰りて風雨時ありその郡子可愛洞とあり十方山
子出づ奇石惟巖多し疑わらくハ此地ありとてそのまを私説
藻塩草子の説子ハ安藝出雲ハ疆界を接す蓋兼川安藝
子つりて埃川とあるともありハ可愛川兼川とあり源も一あり
て出雲子てハこれを兼川との安藝子これを可愛川といふ説あり
まを非子て一書子大蛇の居る所を吾上の峯とす出雲と安
藝との境を接するの國ありされハ吾上の峯あり西北出雲子流
るるを兼川とて吾上の峯より西南安藝子ありるるを可愛川
とするるもその説子非ありゆゑあり出雲と安藝とわ
境を接する國あり寛政年間藤原宣昌といふ人吾上二水
考證とて書をありて兼川可愛川の辨ありそのゆゑとあり

古の卓見前人未及の説といふべし其説子宣昌按ずるも重
 遠説子今安藝國を尋るふ可愛川ありとて安比の川を
 當れり予友祝利万呂といふ者安藝の國に人して日本紀に
 をひそめ可愛川を安藝國に求むれどもその處ありて
 出雲を捜り索てその處跡をゆらぐ夫安藝國八國の名に非
 出雲風土記に載る意宇那安来郷や今能義那子
 してハ杉郷といふ地あり先軍之字に泥して山陽の安藝と
 あやまり混じりマキノクともあり遂にその處を失り改て
 ヤスギノクとよむが郷をめて國とてあはるとその證あり
 神武紀に難波を浪速國とて饒速日命一郷を脱て虚空見
 日本國と名つけその地移彦をりて倭國造りて劍根をて

葛城國造とすは那子郷に三分國とすありありされハ
 安藝とよめハ安来の訓を説るりの子て可愛川ハ安来郷
 をあがれ終て伯耆の大川といふ所の是なりその源出雲の能多那
 能義那の埤葛城山より出て川をいへを川といひ安来をへ
 伯耆國に入りて日根川といふ伯耆國をてその川を總て大川と
 名づくといふこれまで宣昌説あり按ずるは出雲風土記に意
 宇那安来郷神須佐乃島命天避立廻坐之尔時来
 坐比處而詔吾御心者安平成詔故云安来也この文
 子て素戔嗚尊の詔にて安来と名づくるより神代紀一書の傳
 一も符合すと鳥土二水考證も古事記傳の須賀宮つ
 らる條子に引いせむるハいふもや



富士山の高

駿河の富士山ハ三國子あつて其邦子此北山あり、その
の言さいくさくといふとちうへん、塵塚物語子直子三九
十六町あり、六月刈藻集子直子二十五町と云ふ、
いづれの中といふをきく、其保正年の夏、福田某
いふ人測量せし、駿河の吉原宿より富士山の頂まで二百十
六町二分一六、二十間四方の盤子てこれ、里敷子すれハ六里〇〇六〇
〇六とあり、山の言さハ三十五町二分二六三、
寸七寸とあり、其記子云々、二所尺の測法あり、此ハ正しき核
子あり、

翁同答

おきりかんさん
翁同答

吾邦子よく、七、あき陽明五氏の学を、
ヤことく、中江藤樹あり、
世人傳を、
やろく、
くろく、
と學び、
たり、
日手、
しうか書、
つ、
子書、

今^{いま}ん学^{まなぶ}とのふりのおこ^{おこ}る^るれども^{ども}法^{はふ}乃^の学^{まなぶ}ハ^ハや^やく^く後^ご
梅^{うめ}子^こお^おこ^これ^れり^りと^とい^いふ^ふべ^べし^し心^{こころ}学^{まなぶ}の^の書^{かき}く^くお^おく^く多^{おほ}く^く中^{うち}子^この^の
翁^{おきな}同^{おな}答^{こた}子^こお^おこ^これ^れり^りと^とい^いふ^ふべ^べし^し心^{こころ}学^{まなぶ}の^の書^{かき}く^くお^おく^く多^{おほ}く^く中^{うち}子^この^の

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

世^よ事^じ百^{ひゃく}談^{だん}卷^{まき}之^の三^{さん}

